

近世・近代風俗画における服飾表現に関する分野横断的研究

—小袖及び着物の編年的研究への絵画研究の活用—

The Cross-genre Study of Costume Depictions in Pre-modern and Modern Genre Paintings

—Applications of painting scholarship to the chronological study of Kosode and Kimono garments—

長崎 巖<sup>\*1+</sup>, 田沢裕賀<sup>\*2+</sup>, 家田奈穂<sup>\*3+</sup>, 佐藤浩子<sup>\*4+</sup>, 西井智美<sup>\*1+</sup>

Iwao Nagasaki<sup>\*1+</sup>, Hiroyoshi Tazawa<sup>\*2+</sup>, Naho Ieda<sup>\*3+</sup>, Hiroko Sato<sup>\*4+</sup>, and Satomi Nishii<sup>\*1+</sup>

\*1 共立女子大学家政学部 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1

Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University,

2-2-1 Hitotsubashi Chiyoda-ku, Tokyo, 101-8437, Japan

\*2 東京国立博物館

Tokyo National Museum

\*3 ニューオータニ美術館

New Otani Museum of Art

\*4 町田市美術館

Machida City Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

**Abstract:** Our goal was to locate and examine collections of genre paintings produced during the Momoyama, Edo, and Meiji eras, including ukiyo-e paintings and bijinga paintings ('paintings of beauties'). We conducted research in Tokyo, Tottori, Fukuoka, Kyoto, and Tokushima and made some interesting discoveries. For example, we have determined that the screen painting known as the Soga monogatari in the Watanabe Museum collection in Tottori was likely painted in the first half of the Momoyama era because the costumes depicted on this screen share characteristics with actual garments of the early Momoyama era. Through research conducted at the Kyoto Bunka Museum, we were able to identify some defining characteristics of children's kimono of the Meiji era. At the New Otani Museum we discussed the special exhibition that focused on the relationship among ukiyo-e paintings, kimono, and pattern books of the Edo period, and noted the close connection between costumes depicted in the ukiyo-e paintings and extant kimono, and also observed the stylistic changes in Edo-period kimono design exemplified through our study of these objects. During the exhibition, we conducted research and held meetings to discuss topics related to the concept of this exhibition. As we continue our research on genre paintings, costumes, as well as pattern books of the pre-modern through modern eras located in various museum collections, we will

---

\*1) [nagasaki@kyoritsu-wu.ac.jp](mailto:nagasaki@kyoritsu-wu.ac.jp)

work toward establishing and clarifying the relationship among these media.

## はじめに

本研究での重要なプロセスのひとつである、美術館・博物館所蔵の近世初期風俗画、及び肉筆浮世絵・浮世絵版画・近代美人画から、各時代を代表する作品を選定し、その服飾表現の具体相と特徴を整理する、という作業の一環として以下のことを行なった。

- (1) 2009年8月24日、文化ファッション研究機構・会議室において第一回研究会を開催し、今後の研究方針と具体的な研究手法、調査先、調査方法などについて協議した。参加者は、長崎・田沢・家田・佐藤・西井の5名。
- (2) ニューオータニ美術館において、江戸時代の肉筆浮世絵と小袖類及び小袖雛形本を展示する企画展「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」(2009年10月3日～11月23日)を開催し、江戸時代の肉筆浮世絵に描かれている小袖服飾類と現存の小袖服飾類の密接な関係を視覚的に示すとともに、江戸時代の小袖様式の変遷を作品によって示した。本展覧会は、本研究において目指す方向性の一部を披露したものであり、展覧会のために各所蔵者から借用した絵画作品や服飾作品、肉筆浮世絵を調査する機会を得ることもでき、非常に有益であった。下記(3)において行われた研究会がそれである。
- (3) 2009年10月31日、ニューオータニ美術館において、開催中の「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展に展示中の江戸時代前期から後期にかけての肉筆浮世絵及び同時代の小袖服飾類、小袖雛形本(版本及び肉筆)の調査を行なうとともに、これらの相関関係について討議、研究を行なった。この際、特に家田より舞踊図や元禄風俗図についての研究発表が行なわれた。
- (4) 2009年11月16日、近世・近代の帯の様式変遷を明らかにする一環として文化学園服飾博物館において調査を行った。参加者は、長崎・西井。
- (5) 2009年12月14日～16日、近代着物の様式変遷を明らかにする作業の一環として、京都文化博物館において、明治時代の着物服飾類25点の調査を行なった。参加者は、長崎・家田・西井。
- (6) 2009年12月20日～22日、桃山時代の絵画に見られる服飾表現を検証するため、鳥取市・渡辺美術館所蔵の近世初期風俗画の調査を行なった。参加者は長崎・田沢・家田・西井。
- (7) 2010年1月9日～11日、近世における染織作品及び風俗画の所在確認の一環として、香川県琴平町金毘羅美術館、徳島県徳島市の徳島市立徳島城博物館と徳島県立博物館の調査を行なった。参加者は長崎・西井。
- (8) 2010年2月25日～26日、江戸時代の肉筆浮世絵に描かれた小袖服飾類の絵画表現を明らかにする一環として、九州国立博物館において調査を行なった。参加者は長崎・田沢・家田・西井。

## 内容

(1) 2009年8月24日、文化ファッション研究機構・会議室で開催された第一回研究会において、今後の研究方針と具体的な研究手法などについて協議した後、近世初期風俗画、及び肉筆浮世絵・浮世絵版画・近代美人画を所蔵する美術館・博物館・個人をリストアップし、主な所蔵者は、下記の美術館・博物館であることがわかった。

- (東京都) 東京国立博物館・ニューオータニ美術館・サントリー美術館・出光美術館・静嘉堂文庫・太田記念美術館・弥生美術館・国立能楽堂・城西国際大学水田記念館など
- (福岡県) 九州国立博物館・福岡市博物館など
- (山口県) 山口県立萩美術館
- (鳥取県) 渡辺美術館
- (奈良県) 奈良県立美術館
- (千葉県) 千葉市美術館・国立歴史民俗博物館・菱川師宣記念館など
- (愛知県) 徳川美術館
- (静岡県) MOA 美術館

また、江戸時代から明治・大正・昭和時代初期にかけての小袖服飾類及び着物類の所蔵者もリストアップし、下記のような美術館・博物館があることがわかった。

- (東京都) 文化学園服飾博物館・東京国立博物館・江戸東京博物館・共立女子大学など
- (福岡県) 九州国立博物館・福岡市博物館
- (京都府) 京都国立博物館・京都文化博物館・京都工芸繊維大学など
- (鹿児島県) ミュージアム知覧・鹿児島県立博物館など
- (奈良県) 奈良県立美術館
- (千葉県) 国立歴史民俗博物館
- (埼玉県) 遠山記念館

(2) ニューオータニ美術館において企画展「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」(2009年10月3日～11月23日)を開催し、江戸時代の肉筆浮世絵に描かれている小袖服飾類と現存の小袖服飾類の密接な関係を視覚的に示すとともに、江戸時代の小袖様式の変遷を作品によって示した。



「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展

(3) 江戸時代前期から後期にかけての肉筆浮世絵及び同時代の小袖服飾類、小袖雛形本(版本及び肉筆)の調査を行なうとともに、これらの相関関係について討議、研究を行なった。

・菱川師宣筆「元禄風俗図」について(ディスカッション)

元禄時代とされている小袖の作例において、模様表現は比較的柄が大きいことが指摘されているが、

菱川師宣の「元禄風俗図」に描かれた小袖においてもおおむね同様の傾向が認められた。

また、この作品の制作年代について、菱川師宣の女性の顔の表現について、初期においてはシャープであったものが、ふよやかな顔が下ぶくれの作風に変化していることから、画歴の後半に属するものではないかという見解が提示された。

菱川師宣は千葉県保田の縫箔屋の出身である。菱川師宣が下絵を描き、父親の菱川吉左衛門が刺繍を施した「刺繍 釈迦涅槃図」が有名であることから、染織品は師宣にとって極めて身近なものであり、その服飾描写においても、忠実に表現がされているのではないかと考えられる。

#### ・肉筆浮世絵の享受者について(ディスカッション)

肉筆浮世絵に描かれる対象については、圧倒的に町人が多く、武家女性の描かれている菱川師宣の「元禄風俗図」に見られる武家女性の小袖は町人女性のそれに比較して柄が小さい。また武家女性を描いた浮世絵が少ないことから、浮世絵の享受者は一体誰であったのかが、しばしば疑問にあがる。これまでは、経済的にも豊かなに上流武家男性が発注していたと考えられていた。その根拠の一つは、狩野派(幕府お抱えの絵師)の画風に忠実な浮世絵も現存するためである。例えば、安藤出雲守が注文して肖像画として描かせた肉筆浮世絵が現存している。これは一般的な婦人肖像画の形をとるものではなく、明らかに浮世絵と分かるものである。武家男性・女性とともに、普段、武家女性を見慣れている。描かれる人物に武家女性が少ないのは、武家男性・女性にとって、武家女性は普段見慣れたつまらないものだと感じられていたからではないかと考えられる。武家男性・女性は、普段見慣れない、町人女性に魅力を感じ、これを描いた肉筆浮世絵を発注・購入したいと思ったのではないか。その際に、武家女性が肉筆浮世絵を通して見ていたのは、町人女性のファッションであったと考えられる。

需要や供給から考えても肉筆浮世絵の主たる需要者は、武家男性・女性が享受者、という結論に達した。

武家女性がファッションを見るために肉筆浮世絵を鑑賞するのは、これに小袖雛形本と同じ、ファッションブックとしての役割があったからであろう。

#### ・肉筆浮世絵の絵師について(ディスカッション)

江戸時代には、町人と武家を混交しないようにしていたために、浮世絵を描く画師は、町人(職人)層である。社会階層が秩序付けされた江戸時代において、商人層が武家を描くことははばかられたと考えられる。

師宣の絵には「濁」の文字が多い。小袖雛形本にもこの文字が見られる。師宣は小袖雛形本にも絵を描いていたと考えられる。

#### ・舞踊図について(家田による発表)

サントリー美術館蔵の舞踊図に描かれた小袖は、比較的小さい区画の中に模様が配される意匠形式をとる。これは江戸時代初期慶長年間の小袖の様式である。これに対してニューオータニ美術館蔵の舞踊図の小袖は、全体に模様を配置するものであり、桃山時代の小袖様式に当てはまっている。

サントリー美術館とニューオータニ美術館の舞踊図は系統の源流を同じくし、枝分かれしたものとされている。しかし、模様の表現・構図から見ると、ニューオータニの舞踊図の方がサントリーのものに比べ、時代が上がると思われる。

また、京都市蔵の舞踊図、及びボストン美術館蔵の舞踊図は、小袖から腕が出ておらず、桃山時代としては不自然である。

・展示品室で、意見交換・作品解説を行なった。

(4) 2009年11月16日、近世・近代の帯の様式変遷を明かにする一環として文化学園服飾博物館において瓢箪尾長鳥蝶菊御簾模様錦帯(綿入)調査を行った。

瓢箪尾長鳥蝶菊御簾模様錦帯(綿入)に見られる菊の模様表現は、比較的近代のものに近い。帯幅は22cmであり、帯幅から推定した時代判定は、江戸時代元禄頃か、その少し前であると考えられる。同時代の類品が無いため比較が難しいが、元禄を否定する要素がなく、現存遺品の少ない元禄時代の作品と考えられ、非常に貴重な作品だといえる。仕立替えの跡は確認できず、元々この帯幅であったと考えられる。

(5) 2009年12月14日～16日、京都文化博物館において、明治時代の着物服飾類、特に吉川観方コレクションの子供のきもの24点の調査を行なった。その結果、近世・近代の武家・町人男児と女兒の着物の意匠の違いが明らかになった。近世・近代における絵画に書かれたこどもの服飾表現を知る上で非常に有効であるといえる。

#### 調査作品リスト

茶縮緬地葵丸模様桐紋付一つ身  
黒平絹地宝尽鶴亀模様蓬莱紋付一つ身  
白平絹地松竹鶴亀模様茗荷紋付一つ身  
薄黄平絹地宝尽鶴亀模様蓬莱紋付一つ身  
薄黄絹縮地芭蕉扇桐模様単四つ身  
浅葱麻地御所車菱車牡丹模様葵紋付帷子四つ身  
白麻地牡丹折枝扇獅子模様帷子四つ身  
薄黄麻地梅樹牡丹菊笹模様帷子四つ身  
薄紅麻地雅楽模様菱花紋付帷子一つ身  
鼠麻地松樹鶴模様向鷹の羽紋付帷子一つ身  
濃鼠麻地富士松樹鶴模様梅鉢紋付帷子一つ身  
濃鼠麻地松皮菱雨龍模様帷子一つ身  
縹緋地水辺鶴葦模様単一つ身  
染分縮緬地流水桜松竹梅鶴模様違鷹羽紋付一つ身  
浅葱縮緬地野馬模様片喰紋付四つ身  
縹平絹地馬馬具模様一つ身  
染分平絹地御簾葉玉模様桔梗紋付一つ身  
鼠平絹地霧梅樹模様一つ身  
縹縮緬地菊梅御簾貝桶模様一つ身  
染分縮緬地公家遊山模様桐折枝紋付四つ身

鼠平絹地松皮菱羽衣剣酢漿草紋付一つ身  
鼠木綿地雪だるま子供犬模様一つ身  
染分平絹地菘水網干海松貝模様子供被衣  
染分平絹地松竹梅雪輪鼓模様変三つ柏紋付一つ身

(6)2009年12月20日～22日、鳥取市・渡辺美術館所蔵の屏風を中心とする近世初期風俗画の調査を行なったが、その際、同美術館に所蔵されている染織品も調査した。

特に「曾我物語図屏風」では、近世初期の絵画に描かれた武家・町人等の服飾が明らかになった。

染織品については、陣羽織、歌舞伎衣裳等の作品調査を行なった。陣羽織については合戦図に、歌舞伎衣裳については風俗画に描かれる事も多いため、絵画・染織品の分野横断的な調査を行なう事ができた。

鳥取県立博物館・倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館においては、倉吉緋の見学を行なった。

#### 調査作品リスト

(絵画)

曾我物語屏風  
洛中洛外図屏風  
洛中洛外図屏風

(染織品)

白ヘルヘトワン地岩波千鳥模様陣羽織(歌舞伎衣裳)  
萌黄呉縞地唐獅子牡丹模様揚羽蝶模紋付火事羽織(胸当付)  
黒茶ビロード地波雲龍模様四天(歌舞伎衣裳)  
紅縮緬地流水橋蛙模様打掛(歌舞伎衣裳)  
萌黄羅紗地碓水玉模様陣羽織  
納戸地菊唐草模様金襴陣羽織  
縹呉縞地唐獅子模様升入蔦紋付陣羽織  
紅地雲龍模様金襴陣羽織  
紅白縫合松皮菱取桐紋付陣羽織  
猩々緋羅紗地陣羽織  
黒羅紗地陣羽織  
猩々緋羅紗地方喰紋散沢瀉紋付陣羽織(子形用)(歌舞伎・芝居衣裳)  
萌黄羅紗地日輪模様陣羽織(子形用?)  
白木綿地雲龍模様釘抜紋付陣羽織  
紅平絹地陣羽織(芝居・歌舞伎衣裳)  
橙地キ字模様橘紋付陣羽織  
橙地キ字模様橘紋付陣羽織  
浅葱縹子地笹龍胆模様陣羽織  
赤地陣羽織(祭衣裳)

萌黄呉縞地剣方喰紋付陣羽織  
薄萌黄木綿地蝶模様和更紗付着付(歌舞伎衣裳)  
薄萌黄木綿地花唐草模様和更紗付着付(歌舞伎衣裳)  
紫縞子地梅菊露芝兜模様着付  
黒縞子地竹雀模様着付(歌舞伎衣裳)  
麻姑仙図友禅描表装(加賀友禅)  
花鳥図友禅描表装(3幅)

(7)2010年1月9日～11日、四国における大名家伝来の近世染織作品及び風俗画の所在確認のため、香川県琴平町の金毘羅美術館、徳島県徳島市の徳島市立徳島城博物館と徳島県立博物館の調査を行った。

徳島城博物館において、蜂須賀家伝来の染織品の調査、合戦図屏風の調査を行った。その結果、蜂須賀家伝来衣裳のうち男性衣裳はわずかながら所蔵されているが、女性衣裳はわずかしか所蔵されていないことがわかった。また、その後の追跡調査により、蜂須賀家所蔵の染織品のうち、陣羽織などに関しては、現在個人蔵となっており、また小袖に関しては一部が京都・京都工芸繊維大学などに所蔵されていることが明らかになった。

高松城資料室では、松平家伝来の染織品の所在調査を行ったが、ここでも染織品は所蔵されていないことが明らかとなった。金比羅宮宝物館・書院においては、円山派の絵画資料等を見学した。

(8)2010年2月25日～26日、九州国立博物館において近世初期風俗画の調査を行った。調査作品は、「南蛮屏風」3作品である。目視による調査と詳細な写真撮影を行ったが、得られた資料からの具体的な分析作業は来年度になる。

## おわりに

今年度は初年度ということもあり、計画の具体的な実行方針の確認と、中心となる作品調査のための所在確認作業をまず行ない、次に実際に現地調査を行なって、近世初期風俗画、肉筆浮世絵、及び江戸・明治時代の染織品の情報収集を開始した。

絵画作品の調査においては、鳥取・渡辺美術館所蔵の「曾我物語屏風」の成果が大きく、作品の制作年代を描かれた染織品の時代判定からかなり絞り込める可能性が高いことが明らかとなった。また染織品の調査では、京都文化博物館所蔵の明治時代の子供の着物の調査により、この時代の子供の着物の特徴を抽出することができ、今後の明治時代の絵画作品の調査と合わせて、両者の関係を明らかにする助けとなる可能性を大きくした。

来年度も、各地に点在する近世から近代にかけての風俗画及び浮世絵を調査し、情報を収集するとともに、これらの中間に位置する小袖雛形本の調査も開始する。

## 文献

ニューオータニ美術館(編):「肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識」展カタログ、株式会社ニューオータニ(2009)。